

## 主催者挨拶

小山市長 大久保寿夫



小山市長 大久保寿夫

大変お忙しい中、そしてまたご多忙な中、このように多数のみなさまにご出席を賜り盛大に開催できますことを心から感謝申し上げます。小山市におきましては昭和 63 年に、都市景観モデル都市として指定を受けまして平成 6 年 4 月には小山市景観条例を制定したところでございます。そして、その後デザインコンペの実施や、また先ほど紹介もございました、桜の里親制度、そして、グランドワークの推進など市民参加のまちづくりを行っているところでございます。今年、昨年 4 月ですか、白鷗大学が東口に進出していただきまして、法科大学院を開設いたしましたところでありまして、この白鷗大学の法科大学院の開校と併せまして、東口におきましては、小山駅周辺総合調査事業を実施、この 4 月からは、駅前広場、そしてそれに続くアクセス道路などの整備を行いますと共に、近い将来は東西を連結いたします小山駅の中央自由通路の整備も実施する予定になっております。

一方、西口に関しましては、これも先ほどご紹介がありました、私たちの小山市のシンボルであります、また母なる川であります思川を有効活用したまちづくりを行ってまいりたいと考えている次第であります。橋浦さんの言葉をお借りいたしますと、思いが詰まった川ということでございまして、私達も思いを込めて、この思川を活用した西口の整備を行っていきたく思っております。

そういうことで、今回は、第一部といたしまして、先般実施されました「思川へのアプローチのデザインコンペ」の入賞者の皆様による表彰式等を行わせて頂き、そして第二部といたしましては、『いま、街は楽しいか』と題しまして、著名な北山孝雄先生をお迎えいたしまして、思川を有効に使ったまちづくりにおきましてのシンポジウムになっている次第でございます。

本日のこのシンポジウムが、これからの小山市のさらなるまちづくりに有意義なものになりますよう、皆さまとともに参加して参りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

結びにあたりまして、本シンポジウム開催に御尽力を賜りました関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、本日ご列席の皆様のご健勝とご多幸をご祈念申し上げます感謝と御礼の言葉に代えさせていただきます。本日は本当にありがとうございました。

平成 17 年 1 月 2 2 日



## 来賓挨拶

栃木県 土木部長



後援代表 栃木県土木部長 高橋 忍  
(代理：都市計画課課長補佐 川上丈)

栃木県土木部都市計画課の川上と申します。本日は、土木部長所用で残念ながら参れませんので、代わりましてメッセージを代読させていただきます。

「第6回小山のまちづくりシンポジウム」の開催にあたりまして、後援者の方々を代表いたしまして、ご挨拶させていただきます。小山市におかれましては、昭和63年の都市景観形成モデル都市の指定や、平成6年の都市景観条例の制定など、早くから景観形成やまちづくりに積極的に取り組んでおられます。本日は、市制50周年記念事業の一環としてのまちづくりシンポジウムということで、都市景観をはじめとした小山市のまちづくりについて、広く市民の皆様と一緒に考えていこうという企画とお聞きしておりますが、多数の市民の皆様の参加により、このように盛大に開催されますことを、心から感謝いたします。本日は、「今、街はたのしいか」をテーマに、市民の心のより所である思川を活かした、個性豊かなまちづくりを考えるシンポジウムと、伺っております。都市を流れる川は貴重な水と緑を供給して、都市に潤いと風格を与えますとともに、街の個性に大きな影響を与えるものであり、市民に慕われ憩いの場である思川は、小山市の景観やまちづくりを考えるうえでは大変重要な素材であります。こうした特色ある資源を活かし、ゆとりや潤いのある個性豊かな都市を市民の参加を経て行うことによって、一人ひとりが自分の都市に愛着と誇りを、持てるようなものになると思います。また、市街地を走る思川の整備はまちづくりの観点から、都市の整備と一体的に考えていく必要があります。今回は、思川へのアプローチデザインのアイデアコンペも行われたとのことですが、まちづくりと一体となった夢多い提案がなされたことと思われまます。河川を活かしたまちづくりに関しては県としましても今後積極的に取り組んでまいりたいと考えておりますのでよろしくお願ひいたします。また、県では、地域の特性を活かした魅力ある景観を形成し、将来の世代に美しい県土を提供することを目的といたしまして、平成15年に景観条例を制定いたしました。国も昨年景観法を作成いたしましたところにより、景観に関する県民の皆さんの関心は大変高まっております。地域の特性を活かした景観作りは地元の市町村が、住民の皆さんと一緒に主体的に取り組んでいくことが重要になってきますので、県としましても美しい県土作りをさらに推進するため、景観法を活用して積極的に景観政策を実施しようとする市町村の取り組みに対して、しっかりと支援をしていきたいと考えております。市民の皆様方にも、いっそうのご支援やご協力をいただければと、そういうふうと考えております。

最後になりましたが、本日のシンポジウムを契機として、市民の皆様が美しい魅力あるまちづくりに積極的に取り組んでいただけることをご期待申し上げまして、ご挨拶といたします。



# アイデアコンペ審査講評

## 審査委員長



審査委員長 瀧澤雄三（小山工業高等専門学校建築学科教授）

小山高専の滝沢といいます。思川アプローチデザインアイデアコンペということにつきまして、簡単に講評させて頂きたいと思います。今回の、このコンペの舞台というのは「思川」です。この思川は、足尾山系に産声を上げて、その後、幾つかの市町村を通りまして、小山にたどり着きます。そして、古河で渡良瀬川と合流するという川です。ただ、中心市街地を通るといっては、この小山市だけです。しかも、この中心市街地を通るこの部分が一番緑豊かな河岸段丘で、しかも祇園城、鷲城といったものがある歴史ある空間でもあります。こういう思川というものは、市民に意識調査を行っても、小山といたら思川と、ほとんどの人からそう返事がかえってくる川です。まさに小山というのは、思川なしには語れないという、そういう存在だと思っております。

この思川は、小山市のアイデンティティとしても、それから市民の安らぎの場、癒しの場としても、また都市景観からしても非常に重要な川であります。今回のコンペの趣旨は、このかけがえのない景観と歴史のある空間であります思川や、祇園城跡、それと小山市の中心市街地を結ぶ思川へのアプローチデザイン、このアイデアを求めたものであるというものです。と同時に、このコンペを通じて、より多くの人にこの思川、あるいは小山について考えていただくと、あるいはまちづくりに関心を持っていただくとそういう啓発も併せ持っているというふうを考えております。

コンペの応募状況ですが、小山市内・栃木県内はもとより、遠くは九州という広範囲のところから応募いただきました。また、応募者の職業をみてみますと、学生から設計事務所の方、それからコンサルタントの方という、いわばプロの方まで幅広い職業の方が応募いただいております。

トータルで、デザインの部、論文の部、それぞれさきほどお話がありましたように69件応募がありました。審査は一般と子供の部をそれぞれデザインと論文の部に分けまして4部門で審査を行いました。残念ながら、一般の方の論文の部、それからお子さんのデザインの部、これに関しましては、賞に該当する作品は、今回はなかったということになります。

お子さんにとっては今回のコンペの場合、まちづくりとが活性化といったキーワードが含まれる内容でしたので、ちょっと難しいところがあったのかなと思っております。

今回のコンペのメイン部門であります一般の部のデザインの部、これには36点の応募がありました。審査は、一次審査・二次審査・三次審査と三段階で行いました。まず、一次審査で36作品の中から12作品に絞りました。で、この12作品に関しまして二次審査で、審査員各自での投票を行いました。しかし、いずれも力作ぞろいということで、なかなか絞り込むことができませんで、結局、三次審査には10作品が進むということになりました。最終的には、三次審査で最優秀賞をはじめとする各賞が決まったということになります。

メイン部門の一般のデザインの部の最優秀作品に関してですが、この作品は、アイデアコンペのテーマであります「歴史と自然と賑わいの空間 思川」と「リバーステージ 癒しへのプロローグ」というテーマにふさわしい作品だと思っております。本作品は、河川法というものがあるんですが、そういった法律や規制にとらわれない自由な発想の下に生まれた作品であります。そして、小山の歴史に立脚した造形を持たせ、思川との景観の調和をはかりつつ、市民の親水の大舞台として計画提案されております。また、本計画の持つ小山の歴史に根ざした造形美。これは非常に斬新でありまして、小山市民に夢や希望を与えるというようなものになっております。この作品の色彩表現・模型あるいはパソコンを駆使した画像処理。そういった高度なテクニックも併せ持った作品であり、非常に完成度の高い作品だと思っております。このようなことを理由に、最優秀賞に選ばれたと思っております。

また、優秀賞におきましては、これも非常に変化にとんだアプローチ空間を演出しております。他の作品に関しましては、個性と魅力溢れる作品でありまして、審査する私どもにとっても各賞の該当する作品を選ぶというこの作業が非常に大変でつらい面もありました。今回のコンペはアイデアコンペということで、惜しくも入選を逸した作品からも多くの夢と希望を頂きました。また、作品をつくるに当たっては、多くの時間と労力をかけていただいたことと思います。皆様方に深く感謝の意を表したいと思います。

簡単ではありますが、これをもって講評とさせていただきます。どうもありがとうございました。